特別支援教育における同僚性を介した教師の学びと教師文化の継承と創造

―よりよい教育をするために、何を、どのように学ぶことができるのか？―

企画者　吉井勘人・田上幸太・別府さおり（山梨大学教育学部/筑波大学附属大塚特別支援学校/東京成徳大学応用心理学部）
司会者　吉井勘人（山梨大学教育学部）
話題提供者　田上幸太（筑波大学附属大塚特別支援学校）
中込昭彦・原満登里（山梨大学教育学部附属特別支援学校）
水野高明（鹿児島県総合教育センター特別支援教育研修課）
指定討論者　別府さおり（東京成徳大学応用心理学部）

KEY WORDS: 教師の学び　同僚性　研修

【企画趣旨】

現在、我が国における特別支援教育システムが漸進的に構築されていく中で、多忙化、教師への多様な役割期待、大量退職によるベテラン層の喪失と年齢構成の偏り、インフォーマルなつながりの希薄化などを背景として、初任者や中堅の教師が自身の専門性を高めるための学びの機会が十分に確保されていないといった状況にあると捉えられる。自明のことであるが、養成課程で学んだ知識のみでは子ども達に十分な教育を行えないであろう。そこには、教師が学校における教師文化に参入し、同僚との関わりの中で実践知を高め、教師文化を継承・共創していくプロセスが必要になると考えられる。

本シンポジウムでは、熟練レベルにある教師を話題提供者として、教師が同僚との関わりや自主的、組織的な研修を通して、どのように学び、やりがいを見出すとよいのか、また、自身の実践の揺らぎや葛藤をどのように受け止めていくとよいのか、さらには、教師文化の継承と創造はどうあるべきかといった多角的な視点から、教師の学びと教師文化の継承と創造のエッセンスと課題を検討していきたい。

【話題提供者の趣旨】

話題提供１　教師の学び合いのための自主研究会の試みとその課題：田上幸太（筑波大学附属大塚特別支援学校）

特別支援教育、特に知的障害教育において、学校で何をどう教えるかを組織し、授業を行うこと、さらにそれを継承するのはたやすいことではない。筑波大学附属大塚特別支援学校では、教師の同僚性を基盤に、実践知を高め、協同して授業をする力を身につけるために、校内授業研究の改善に取り組んできた(田上、吉井ら 2016 他)。さらに、授業研究会に参加した教師の意識調査に取り組んだ結果、授業研究への満足度は年代ごとに差があること、特に経験が１～５年の若手教員において満足度が低い傾向があることを明らかにした(田上ら、2015)。これらの研究成果を踏まえ、話題提供者らは 2016 年度より若手教員の学びに重点においた校内教員向けの自主研究会を行っている。「インクルーシブ教育における合理的配慮とは？」、「集団の目標から授業をつくるプロセスを学ぶ」などをテーマに、経験が 10 年前後の中堅教員が若手教員の学びをサポートしつつ共に学び合うプログラムに取り組んでいる。本シンポジウムではこの自主研究会の取り組みについて紹介し、参加した若手教員等のアンケートを踏まえつつ、教師の学びにおける自主研究会の意味と課題について話題提供を行う。

話題提供２　同僚性の中での学びとその課題　①教師としての成長の視点から②学校研究を通した校内体制づくりの視点から：中込昭彦・原満登里（山梨大学教育学部附属特別支援学校）

①教職についたその日から教師となるが、最初から全てが備わった存在ではない。本シンポジウムでは、特別支援学校での 30 年の教師としての歩みを基にして、教師として必要な資質についてどのように学び、どのように蓄積し、どのように振り返るべきなのか。また、後輩に伝えていく意義と方法について議論したい。②特別支援教育、特にティームティーチングにおいて授業が行われることの多い知的障害教育において、教師同士が互いに支え合い、高め合っていく同僚性を高めることが必要である。そのためには、教師一人一人の知識や経験からの学びのみならず、教師集団としての学びを視野に入れた取り組みが重要である。本シンポジウムでは、学校研究を中心として、同僚性を高めるための校内体制づくりの工夫や教師間のサポーティブな関わりを紹介し、教師一人一人が自らの学びについて振り返ったり、主体的に学ぼうとしたりするための課題について話題提供を行う。

話題提供３　研修による学びとその課題：水野高明（鹿児島県総合教育センター特別支援教育研修課）

特別支援学校の教師の専門性向上に関しては、本県でも喫緊の課題である。ここ数年、各校においてワークショップ型の授業研究会が普及しつつある。経験の浅い教師から経験豊富な教師まで全員が活発に感想や意見を述べ、短時間で次時の具体的な改善策を参加者全員で導き出すことができる点で相互研修の意味を担っている。しかしながら、一単位時間内の授業者の関わり方や手立てが話題の中心となり、教科の本質や単元・題材観などに触れ、教師の専門性や指導観を高めるという点では十分とは言いがたい面もある。本県の特別支援学校に勤務する 850 人を対象に実施したアンケート調査では、個別の指導計画の活用を通した日々の授業実践の充実に関しては、満足を示している回答が少なく、また、経験年数によって大きな違いがないことが明らかになった。つまり、勤務年数や実践経験の増加だけでは、専門性に基づく教師の指導力向上が十分に期待できない可能性もあり、今後、戦略的な研修の在り方について模索していくことが必要であろう。その際、「ティーム・ティーチングでの指導」「中・高等部では専門教科以外の指導」「知的障害、重複障害の場合、指導内容や指導方法を一人一人に導き出す作業」など、特別支援学校における指導の特徴といえる部分についても踏まえておくことも必要であると考える。

【指定討論者の趣旨】

「教師の学びとは？」「知的障害教育に必要なこととは？」という古くて新しい問いに迫る指定討論としたい。

（YOSHII Sadahito、TAGAMI Kota、BEPPU Saori、NAKAGOMI Akihiko、HARA Midori、MIZUNO Takaaki　）